

山田 由香里

長崎総合科学大学 工学部 工学科 建築学コース 教授

YUKARI YAMADA

Profile & Answers

神奈川大学大学院工学研究科博士後期課程修了。博士(工学)。平戸市教育委員会、各務原市教育委員会を経て、2007年長崎総合科学大学准教授。2016年から現職。2009年に第1回日本都市計画家協会楠本洋二賞最優秀賞受賞(テーマ「平戸の町並み調査とまちづくり-オランダ商館復原、そして歴史環境再生へ」)。著書に『図説 長崎の教会堂-風景のなかの建築』(木方十根氏と共著/河出書房新社、2016)など。1級建築士。

- ①4歳と2歳の子どもと遊びに行く場所を見つけること
- ②子どもと遊ぶ ③お片付け本(息抜き用)
- ④人と関わる仕事 ⑤よく食べて、よく寝て、よく遊ぶ





世界遺産や国宝を支える 陰の立役者

山田由香里教授の専門は建築。とは言っても、建物を造るのではなく、歴史ある古い建物を調査し、その結果を踏まえ、歴史を活かしたまちづくりを提案するのが主な仕事です。最近では、建物を世界遺産や国宝にするお手伝いといった仕事も増えてきたといいます。歴史ある建物がどんどん失われていく今、山田教授の研究は注目を集めています。

Think globally, Act locally.

2015年7月、島根県の松江城天守が国宝に指定されました。山田教授はこの城を調査したメンバーの一人。松江城は戦後に行われた大々的な修理の際に、傷んでいた柱や梁の多くが新しい木材に取り替えられたそうで、山田教授は修理の記録をもとに、建築当初の姿を推測したといいます。この時の調査で今まで知られていなかったことが明らかになり、その結果、松江城は国宝に指定されました。

現在、世界遺産登録への動きを見せている長崎県の教会群も山田教授が調査を手掛けたひとつ。「私が調査した上五島の頭ヶ島天主堂は石造りの教会堂です。これまで頭ヶ島天主堂は島の周りの石を使って造られていると言われていましたが、実際の石切り場までは分かっていませんでした。しかし今回、漁船に乗り周囲を調査した結果、だいたいの場所を見つけることができました。石は大変重いので、石切り場から船を使って運び出すという手法は全国各地で見られます。しかし今回発見した石切り場では引潮の時にしか切り出すことができない場所もありました。ですから当時、石工は引潮の時間帯を狙って石を切り出していたということになります。今回の調査を通して、そうやって切り出した石を使って、教会建築を造ったことが分かりました」。

こうした山田教授の研究がまちづくりに活かされた例もあります。それが平戸です。現在はその魅力的な街並みが脚光を浴び、多くの観光客が訪れるまちとして知られていますが、山田教授が所属大学院の故西和夫 神奈川大学教授と調査を始めた2000年は、地元の人たちの街並みへの関心は大変低かったといいます。当時は平戸オランダ商館の復元が行われており、平戸市はこれを目玉にまちづくりをしよ

うと考えていました。しかし「そこだけ見て帰られてしまうと、地元は全く潤いません。地元にお金を落としてもらうためには、平戸オランダ商館から続く街並みを魅力的にする必要があると考えました」と山田教授。その思いは地元の人々へ届き、まちづくりがスタート。今や平戸は年間170万人以上が訪れる長崎を代表する観光地へと生まれ変わりました。

研究の魅力を山田教授はこう話します。「どこかに出掛けて行って、建物の調査をし、それまで言われていることとは異なる事実が分かってくることは、とても面白いことです。しかしそれ以上に面白いのは、調査の結果、みなさんがその建物に興味を持ってくれること。建物は昔から変わらず同じ場所にあります。しかしその価値が明らかになることで、多くの人が興味を持つようになるというのは、とても嬉しいことです」。

それまで関心がなかった建物や景観が国宝や世界遺産になるたびに大喜びをする私たちは現金なものですが、その陰には、誰に注目されずともその価値に気づき、地道に調査を続ける山田教授のような研究者がいるのです。「地味な仕事ですよ」と話す笑顔は、どこか誇らしげでした。



“古い=無価値”は古い！ 歴史あるものこそ宝物



山田教授が建築の世界に進もうと決めたのは、高校生の時。それは家庭科の授業で住宅を作るという課題を与えられた際、「方眼紙に間取りを描いている時間が楽しかったから」という理由でした。しかし建築は建築でも、歴史の分野に進むと決めたのは大学の卒業間際だったと言います。「授業で京都の桂離宮のスライドを見た時に、なんて素敵な建物なんだろうと思いました。それまでは近代建築のデザインが好きだったので、すでに日本にこんなに素敵な建物があったのかと驚き、これを学ばずにデザインをやっても仕方がないと思い、建築の歴史の研究室に進みました」。

それ以来、20年にわたって建物の歴史を研究してきた山田教授は、今後の20年についてこう話します。「私がやりたいと考えているのは、歴史的建造物に不動産価値を付けることです。欧米では古い建物ほど価値がありますが、日本家屋の場合は逆に、不動産価値は

建てた時が100%で、使えば使うほど目減りしていきます。長崎のまちを見ていると、どんどん町屋がなくなっていますよね。私はあと50年もすれば、長崎は魅力のないまちになってしまうのではないかと危惧しています。そうならないために、ひとつひとつの町家を保存する方法もありますが、『町家を壊してマンションを建てるよりも、長い目で見ると、町屋を残す方が不動産価値はありますよ』と言えるようになれば、みんな町屋を残すようになると思うんです。日本にはマンションに住み、コンビニで買い物を済ませる人たちが急増しています。そうするとマンションとコンビニの間の風景に関心を寄せる人が減り、どのまちも同じような建物が建ち、風情は失われていきます。それを防ぐためにも、若い人にまちづくりに関心を持ってもらうことがとても大切です」。



これから山田教授の研究室では外海地方(長崎市出津町)に赴任したフランス人宣教師のマルコ・マリー・ド・ロ神父が祖国から持ってきた道具についての調査を開始します。ド・ロ神父が建てた建物はすでに文化財の指定を受けていますが、ド・ロ神父がフランスから持ってきた農機具や建築道具などはこれから詳しく調査をすると言います。山田教授はド・ロ神父の道具は、1910年代に爆発的に売り上げを伸ばしたフランスのある通販会社などのものではないかという大胆な推測を立てています。「神父様の働きを支えたのがカタログショッピングだとしたら、面白いですよね」と、山田教授は茶目っ気たっぷりに笑います。3年をかけて行われるこの調査で、新たな歴史の事実が発見されるかもしれません。

世界遺産から農機具まで、山田教授の研究対象の幅広さには驚かされます。「私は人間が作ったものが好きなのだと思います。建物でも道具でも、どこかに作った人の工夫が見られます。長崎は建物を研究する上でとても魅力的な土地です。古い資料も随分と残っていますし、調べようと思ったら、まだまだ新しい発見があると思いますよ」。

山田教授の研究はまるで宝探しのようなものです。私たちが何気なく見ている風景の中には、まだ気付いていない宝物がたくさんあるのかもしれない。

取材協力:長崎市吉田家住宅(国登録有形文化財、長崎市景観重要建造物)
吉田寛重氏



Fields of research

- ・山田由香里 研究者情報
- ・吉田家住宅主屋および長屋門